

(校異) ことに「こゝに(承応・内閣・松平)

校異のうち、底本の「ことに」では意が通じにくいので、諸本のように「こゝに」の本文による。そこで「いつよりこゝに有馬山」の「有」が掛詞となってくる。

また、この歌は、

有馬の湯に忍びて御幸侍ける御供に侍りけるに、湯の明神をば

三輪の明神となん申侍なる、物に書付けて侍ける

珍しく御幸をみわの神ならば駿有馬の出湯なるべし

(按察使資賢・千載・神祇・一二六四)

の歌と、

わがいほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど

(読人しらず・古今・雑下・九八二)

とを背景にする。

一首の意は、杉をしるしとするこの三輪の明神は、いつの世から跡をたれて、この有馬山にいらっしやるのかとなる。

世の中しづまりて後、日野大納言家に、寄松祝

(70) 千代ふべきみどりぞいまはあらはる、としのさむさにみえし松がえ

(一四三九)

(校異) さむさーさむき(承応・内閣・松平)

一首は、年の寒いときでさえ緑であった松が枝は(世が静かになつた今)いよいよ千代も経るような緑があらわれたという意になる。

詞書にあるように、戦乱が治まり、ようやく平穩になったことを祝しているのである。「諺解」は「貞松彰ニ歳寒」、「忠臣見ニ国危」

(文選)と「歳寒松柏後凋」(論語)を参考として引用している。

(昭和56年7月14日受理)

古来、夜の雨を聞くことは、懐旧の思いをよびさまし、寂しいものとされてきた。また、「浪のまくら」は、  
水鳥のかものうきねのうきながら浪の枕にいくよへぬらん

にみえ、頓阿自身も、  
古里は夢にも猶やうとはまの浪のまくらに月をのみみて

（統草庵集・四三六）

と詠じている。

(67) なき人を月あかき夜をくり侍し事をおもひ出て  
鳥べ山けぶりもえたつ其夜しもさやかにみえし月もうらめし

（一三三五）

（校異）なし

「諺解」は

とりべ山たに、けぶりのもえたらばはかなく見えし我としらなん  
（読人しらず・拾遺・哀傷・一三二四）  
を本歌とするが、どうであろうか。ただ作者の念頭にあった歌とは  
いえよう。

さらに「諺解」は「なき人を鳥部山の烟となし、其夜しも。月さへ  
明らかに照して。ことに悲しかりしゆへ。今夜の月をみるも。その  
夜の月を見るやうにて悲しく恨めしき也。」と解する。この解は、  
月の明らかに照すことによつて、悲しさがますます深くなるとする  
のであるが、「月もうらめし」とするところと一致しない。「月もう  
らめし」としたのは、このような涙にくもる葬送の夜に、曇ること  
もなく明るい光をなげかけている月をうらめしく思ったのではな  
らうか。「其夜しも」と強調しているのは、「折りも折」其の葬送の  
夜にということである。

また、この歌を詠じた夜にも、葬送の夜と同じように月光がさえ  
わたつていたとみるのは、昔のことを思い出すところからみても妥  
当であろう。

雪ふる日、母のはかにまかりて

おもひやる苔の下だにかなしきにふかくも雪の猶うづむかな

（一三三八）

（校異）なし

頓阿の、今は亡き母を追慕する気持ちが素直にうたわれている。

この「苔の下」は墓のことである。

母の亡骸が苔の下にあると思ひやるだけでも悲しいのに、その上  
に雪が降つて、なお深く埋めることだ——いよいよもつて悲しいこ  
とだの意。

寒々と雪の降るなかで、母の墓の前に跪いて涙を流す頓阿の姿が  
彷彿としてくる。

「苔の下」を用いた哀傷歌には

定家朝臣母みまかりてのち、秋の比、墓所ちかき堂にとまりて  
よみ侍りける

まれにくる夜はもかなしき松風を絶えずや苔の下に聞くらん

（俊成・新古今・哀傷・七九六）

などがある。

なお、「兼好自撰家集」には「頓阿母のおもひにてこもりゐたる春、  
雪ふる日つかはす」という詞書で、贈答歌が収録されているが、雪  
が降っていることからみて、同じ時の歌の可能性がある。

有馬湯にて、社頭杉といふ事を

(69) 跡たれていつよりことに有馬山杉をしるしの三輪の神垣（一四一七）

今、まさに老松に吹く松風の音を聞きながら、昔、ここに住んでいた人の寂しい心境を思いやっているのである。

曉述懐

(63) おもひにし身のあらましのはかなさも我夜ふけゆくねぎめにぞしる

(一二四六)

(校異) おもひにしーおもひこし(承応・内閣・松平)、はかなさ

一かなしさ(承応)

校異のうち、底本の「おもひにし」より「おもひこし」の方が妥当な本文であろう。また、「我夜ふけゆく」と「夜」をあてているが、我が年齢のふけゆくこともきかせている。

一首の意は、若い頃からの、こうありたいと思いつけてきた身の上のことが、どれもかなわずむなしかつたことが、我が年齢を重ねて老いた頃の暁方の寝覚めに、つくづく思い知ることだとなろう。

暁の寢覚は、老齡の時期を示すとともに、越し方行く末をしきりに思いかえすことの多い時間でもある。

(秋旅)

(64) 草枕おきいで、みればかり鳴てさむきあさけの月ぞのこれる

(一二七八)

(校異) なし

起きだして雁を見る気持ちは、在家のときと旅宿とは相違する。この歌は「草枕」をそのまま旅寝の意に用いているので、野原で一夜をあかしたと設定しているのであろう。かかる旅先の野宿から目覚めて、飛びゆく雁の鳴き声は、同じ旅するものとして悲哀の感情をもって聞きとられるにちがいない。しかも、朝方の空には、寒々と月が残っている。いよいよ物わびしくなる気分を詠じている。

「諺解」は本歌として、  
鴈なきて寒き朝の露ならし龍田の山をもみだす物は

(よみ人しらず後撰・秋下・三七七)

を指摘しているが、もとより類歌とみなす方がよい。

高野にのぼり侍し時

(65) 名もしらぬみ山の鳥の声はしてあふ人もなしまきの下道(一二八四)

(校異) なし

作者が高野山に登ったときに体験した景情を詠じたもの。初句の「名もしらぬ」は正統国歌大観に例がないように、雅的な表現ではない。

「名もしらぬみ山の鳥」ということで、深山を示す。深閑とした山で名も知らない鳥の鳴き声を聞きながら、誰一人としてやつてこない槇の下道を登ったことだという意。静寂のなかに鳥の声や自分の足音を聞きながら登り、「あふ人もなし」に作者の信仰にかける決意のほどがみえる。

旅泊雨

(66) あしの葉に夜の雨きくみなと江の浪のまくらをいかであかさん

(一二三〇八)

(校異) 雨一浪(内閣・松平)

校異のうち「浪」は歌題の「旅泊雨」にもかなわなしいし、重複するのでとらない。

「あしの葉に夜」の「夜」には声の節をかけてある。

一首は、湊での旅泊はただでさえも寂しいのに、芦の葉に夜の雨を聞きながら、浪を枕にして、どのように夜をあかせばよいのかの意。その背後に、寂しさで一夜をあかしかねるといふ気持ちがある。

(60)

山家嵐

世の中のうきをしのばですてしかど松のあらしはたへてこそきけ

(一一九二)

(校異) かどより(内閣・松平)

この歌中の人物は世の憂きつらさに耐えきれず出家、遁世したという。その草庵で、古来、寂しいものとしてある松の嵐を耐えながら聞いているのである。

世の中の憂きつらさには我慢できないで世を捨てたけれど、山家に吹く松の嵐は耐えて聞いているという意。

この歌の背後には、山家の嵐―特に松に吹く嵐は寂しい限りであるが、世の憂きよりは、まだ耐えて聞けるという気持ち、歌でいえば、

山里は物のわびしき事こそあれ世のうきよりはすみよかりけり

(よみ人しらず・古今・雑下九四四)

の発想があるのであろうか。

なお、異文の「より」に従うと、出家して以来、わびしさや寂しさに耐え得る精神力をつけたので、松の嵐も耐えて聞けるという意にもなる。

山家松

(61) 山ふかみ松はむかしの友ならでなれゆくかぜの声ぞさびしき

(一二二〇)

(校異) 声―音(承応・内閣・松平)

この歌は

たれをかもしる人にせんたかさこのまつもむかしの友ならなくに

(興風古今・雑上九〇九)

の周知の歌に依拠している。

「諺解」で「山ふかく住には。松をこそ友とすべきに。友にはならず。却て風の音のさびしき也。昔の友ならでといへば。いまだ山中にひさしく住ぬ事見えたり。それゆへなる、程風のさびしき也。」

と解するのに対し、「玉箒」は「諺解に。いまだすまぬ事見えたりといへるはかなはず。其心はなし。昔の友ならでとは。本歌によるのみ也。」と批判している。

(61)の歌の眼目は、下句の「なれゆくかぜの声ぞさびしき」にあり、普通、なれてくれば、寂しさもなくなるのであるが、それを逆手にとって、なれても松は昔からの友でないのと本歌を背景に弁明したところにある。

山奥深い松は昔からの友ではないので、いくら聞きなれても、松風の声は寂しいという意である。頓阿に

山里に松のあらしはなれぬるを又今さらにうき夕かな

(草庵集・一二〇八)

の歌がある。

山家老松

(62) 山ふかみたがすみわびしあとならむ老木にのこる庭の松かぜ

(一二二二)

(校異) なし

「山家老松」という歌題が、庭に老松のある山の家という場面を設定している。「老木にのこる庭の松かぜ」の「庭」ということで、そこにかつて人が住んでいたこと、「のこる」で、松風が昔のままに吹いていることを示す。

一首は、こんな山深いところに、いったい誰が住みわびて捨てた跡であろうか、その庭にある松の老木には、風が昔のまま寂しく吹いているという意になる。

現実にはいうまでもなく、夢の中にさへも恋しい人にあえないこの歎きを、どのようにして相手に告げてやればよいのか、この宇津の山路には、それを伝えてくれる人にも逢わないことだという意になる。

夢の中でも恋しい人に逢えないということは「伊勢物語」の場合と同じであるが、この事実を「伊勢」のように、告げてくれる人がいないとするとところに、一つの屈折をもたせている。宇津の山より都は遠いので、「遠恋」の歌題にもそうことになる。

颯

(57) 月は猶たかまど山のこずえよりあかつきおつるむさ、びのこゑ

(一一三七)

(校異) なし

「月は猶たかまど山」の「たか」は、月が天空に高くあることと、高圓山をかけている。また、颯が梢より鳴き声をあげながら飛び落ちてくるのに、声に着目して「あかつきおつるむさ、びのこゑ」としたところに工夫がある。声が落ちるといふ表現は、頓阿の私淑した西行にも

郭公深き嶺より出でにけりとやまのすそに聲のおちく、

(新古今・夏・二一八)

という歌がある。

一首は、月はまだ天空高く残っているが、あかつき方の高圓山の梢より、颯の飛びおりてくる声がある意となる。

天空に澄む月光、深閑とした森の中に響く颯の一声、どこことなく寂しい感覚の緊張を催させる世界である。

なお、「高圓山」と「颯」の結合から、作者は、

大夫の高圓山に迫めれば里に下りける颯風をこれ

(万葉集・卷六・一〇二八)

の歌を念頭においていたと思う。

橋辺花

(58) 山人の跡みゆるまで谷川のこけむすはしに花ぞちりしく(一一五九)

(校異) ちりしく一ふりしく(内閣・松平)

「諺解」は「橋に苔ふかきゆへ。山人の通ふあとも見えぬを。花の散たるゆへ跡の見ゆる也。」といっているが、苔が深いと山人の通った跡が見えないとするのは不審である。ともかく、この一首の眼目は、山人の通った跡が見えるほどに、多く散りしいた桜の花びらにある。

谷川にかかっている苔むす橋に、山人の通った跡が見えるほどに、花びらがたくさん散りしいている景である。

緑の苔と白い桜の花びらの色彩の対照が鮮やかである。「諺解」は李白の「落花寂々委蒼苔」を参照すべきだと引用している。

秋の末に虫の声をき、て

(59) 朝日さす野べの草ねにきこゆなり夜さむの霜によはる虫の音

(一一七四)

(校異) なし

昨夜聞いた虫の音と今朝聞いたものとを対比的にとらえている。昨夜は霜のおいた厳寒だったため、虫は弱々しくかすかに鳴いていたが、今朝になり朝日がさして野べの霜もとけたので、はっきり鳴いているというのである。

「野べの草ね」は昨夜霜のおいたところであろう。秋の末に鳴く虫といえば、「よわる虫の音」という発想が常套的になつていて、この歌はそれを前提として、なお、朝日のさす中での虫の音をとりえて、その変化に着目したところが新鮮といえる。

ているうちに、とうとう鳥の音も聞えない夜明けになってしまったという意。

主題は別れがたき恋情である。「諺解」は「よハ哉といふにはやく別るべき物を。をそく帰るまゝ。人や見るべきと。けづかひする心のふかくこもる也。ふかく心のこもる哉也。」と説明している。

月前別恋

(54) このまゝに又やみざらん白妙の袖のわかれの有明の月（一〇〇二）

（校異）なし

「このまゝ」とは別れたままの状態である。「又やみざらん」は、別れの時にでていた有明の月を再び見ることがあろうかという意。もちろん、この歌の月は「袖のわかれ」とあるので、涙の袖にやどつた月でもある。

一首の意は、このまま別れて再び見ることがあるであろうか。別れのときの涙の袖にやどつた有明の月を、となろう。背後に、もう見ることがないかもしれない（二人が逢うこともないこと）という不安な気持ちもこめられている。

「白妙の袖のわかれ」といえば

白樺の袖の別れは惜しけども思ひ亂れてゆるしつるかも

（万葉集・卷十二・三二八二）

の歌や、この歌を本歌とした

しるたへの袖のわかれに露おちて身にしむ色の秋風ぞふく

（定家・新古今・恋五・一三三六）

などが作者の念頭にあつたらう。

寄草恋

(55) うかりける人の心のあさぢはらなびくとみれば秋かぜぞふく

（一〇一六）

（校異）なし

「人の心のあさぢはら」は「心の浅い」と「浅茅原」をかけ、「なびく」は草がなびくと相手の心が自分の方に寄りそつてくることをきかせている。また「秋かぜ」にも「飽き」をこめている。

一首は、憂くつらいあの人の心は、私を思う気持ちが浅いので、一端は心を寄せたようにみえたが、すぐに飽きて、つれない心になつてしまつたの意である。

秋風によつて浅茅原がなびく風景を恋情と重ね合わせた類歌として、「諺解」は

色かはる人のこゝろの浅茅原いつより秋の霜は置くらむ

（公脩・続千載・恋四・一四三三）

を引いている。

遠恋

(56) 夢にだにみえずといかでつげやらんうつの山路はあふ人もなし

（校異）みえずとーみえずは（内閣）・こえずは（松平）、山路一

（一〇四五）

山べ（内閣・松平）

いうまでもなく、この歌は、次の「伊勢物語」の東下りの段を念頭においている。

行きく／＼て、駿河の國にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが  
入らむとする道は、いと暗う細きに、つたかえでは茂り、物心ほ  
そく、すぐろなるめを見ることと思ふに、修業者あひたり。「か  
かる道はいかにかいます」といふを見れば、見し人なりけり。  
京に、その人の御もとにとて、文書きてつく。

駿河なる宇津の山べのうつゝ、にも夢にも人にあはぬなりけり

（九段）

応・内閣・松平)、もえぬーもらぬ(承応・内閣)

この歌は「諺解」も指摘するように、「源氏物語」(藤裏葉)のあさき名をいひ流しける河口はいかゞもらし、関の荒垣

を念頭において詠ぜられている。従って、校異のうち「あしがき」よりも「あらがき」、「もえぬ」より「もらぬ」の本文の方が、各々妥当かとも思う。

「かはぐちの関」は「勢州にて川に有関なり」(諺解)とする。

「かくてのみ」は、下旬の川口の関に荒垣をすえて、毎夜監視する状態をさす。

毎夜毎夜川口の関に荒垣をすえて監視しているので、二人の恋仲はこのまま隔たってしまうのであろうかという意。

恋歌の中に

(51) おもひあればはま松がねを枕にてねぬ夜のとも波はかけつ、

(九一四)

(校異) 波はー浪ぞ(承応)

「諺解」はこの歌の本歌として

大伴の高師の濱の松が根を枕き寝れど家し思はゆ

(持統天皇・万葉・卷一・六六)

をあげるが、「松が根を枕き」の措辞をとりこんだままで、本歌とはいえないだろう。

(51)の歌の「ねぬ夜」の「ぬ」は打消の助動詞で「おもひあれば」は「波はかけつ、」に関連するとみてよい。

従って一首の意は、相手を切なく恋うる気持ちがあれば、別に松の根を枕にしてねない夜の床であつても、枕に波がかかることだとする。波とはいふまでもなく、相手を恋しく思つて流す涙を比喻したものである。涙で寝床も浮くばかりになるということは、「源氏

物語」(須磨)などにもみえる伝統的な発想になつている。一首は恋情の激しさをうたつている。

折身恋

(52) きぶね川いまはみなはもきえねとやみそぎにかけん波のしらゆふ

(九三〇)

(校異) みなはーみなと(内閣・松平)

貴船神社に恋を折つたものには、和泉式部の「物思えば澤の螢も」(後拾遺集・神祇・一一六四)という著名な歌がある。頼阿も式部の歌を念頭においていただろう。

(52)の歌には、恋しい人に逢えないという苦悩が背後に設置されている。また、「いまはみなはも」の「み」には「身」がかけられているし、「かけん」は願かけのほかに「しらゆふ」をかけることもきかされている。

一首の意は、貴船川で今はもう我身も水の泡のように消えてしまふと破をして、波のしらゆふをかけるように神に願をかけたこととならう。

貴船川の波の白くわきたつ所で、そこに生じた水泡をみながら、恋の疼きをひめた身を神に投げ出している姿である。

別恋

(53) なきぬれどわかれもやらで鳥の音のきこえぬまでにあくる夜は哉

(一〇〇〇)

(校異) あくるー明ぬ(内閣)、鳴ぬ(松平)

「別恋」といつても、この歌では、すっかり離別するのではなく、後朝の別れである。

二人の逢瀬を別れさせる鳥は鳴いたけれども、なお別れがたくし

ことにもよろう。

竹の葉に霞のちる音に聞きいつている主体は、この場合、庵を結ぶ人かもしれない。そうすると、隠者の清烈な精神と音の寒けさが深く交響するようである。

曉雪

(48) 白妙のゆふつけ鳥もうづもれて明る梢の雪になく也（七八六）

（校異）なし

「諺解」は「木綿ハ白き物なれば。白き鶏といはんためにいへり。白鶏は曉にもまがはず見ゆれども。雪に埋れたる也。」とし、さらに、家隆の

たつた山まだ明やらぬよこ雲にゆふつけ鳥のうづもれてなくを類歌にあげる。（玉吟集・二六四〇）

これに対して「玉箒」は、「諺解あやまり也」とし、「庭鳥は何色にもあれ。白き木綿を付たるが雪にまがひて。庭鳥もうづもれたるやうに見ゆる也。二の句のものは。梢のうづもれたるに對して鳥も也。庭鳥は實に雪にうづもれて鳴くこと有べくもなし。」と批判し、「玉吟集」の歌の雲にうづもれて鳴くのは同じでないとする。「諺解」が表現に即して素直に解したのに対し、「玉箒」は合理的に理解している。この判断は微妙だが、雪のつもった梢にとまった、ゆうつけ鳥の羽根にも雪がちらついているのを、雪にうづもれたとみたのではなからうか。

なお、この歌は「風雅集」撰集の際に、次のような取沙汰があったものである。

これは、頼阿歌なり。風雅集御自撰の時、この歌を御なほしあつて、雪や鳴くらむとして、此の集に入れらるべき由仰せくださる。御返事に申すやう、さやうになほして、此の歌を入れらるべき

きにて候はゞ、ひらに御免あるべき由かたく申しあげて、さて別の歌入れてこれは入れず。道は如レ此と物語あり。げにも雪やなくらむは實なき所也。（東野州聞書）

この逸話は、当時の京極派と二条派の表現理念の相違を示唆して興味深い。

深山雪

(49) つもれたゞ入にし山の峯の雪うき世に帰るみちもなきまで

（校異）なし

（八〇九）

この歌は「続千載集」（雑上・一八〇六）に「題しらず」として入集している。「つもれただ」の「ただ」は、ひたすらつもれという気持ちである。「入にし山」と言っているので、この歌中の人物は「うき世」から逃れて山深くに庵室を結んでいることになる。

雪が降り始めたのを見て、ただひたすら積ってくれ、峯の雪よ、私があつた憂き世に帰ってゆく道もないほどにという意。

このように詠ずる人物は、いまだ完全に隠者になりきっていないので、うき世へのかすかな未練を抱いているのであろう。「みちもなきまで」の措辞は早く「古今集」に

わがやどは道もなきまで、あれにけりつれなき人をまつとせしまにとみえる。（遍昭・恋五・七七〇）

とみえる。

被妨人恋

(50) かくてのみへだてやはてんかはぐちの関のあしがきもえぬ夜もなし

（校異）はてんーはせん（内閣・松平）、あしがきーあらがき（承

（八九二）

承



を、今度は庭の萩原の枯れ葉に残して聞くと、いよいよ寂しいという意である。

萩に吹く風は、古来、聞く人に孤独の心情を湧きたたせるものとしてある。憂く辛い秋風を「かれ葉にのこす」と表現したところが優れた趣向である。

(網代)

(45) はしひめのねぬ夜のともや網代守月影さむしうぢの川なみ(七二三)

(校異) さむしーさびし(内閣・松平)

この歌は

さむしろに衣かたしきこよいもや我を松寛宇治の橋姫

(よみ人しらず・古今・恋四・六八九)

の歌を念頭において創作されたろう。「橋姫」「宇治」「さむしろ」↓「さむし」などの一致のほか、「古今集」の歌が、衣をかたしいて今夜も一人で我を待っているだろうとしたのに対し、(45)の歌は、眠られぬ夜に、一人でなく網代守を友として夜をすごすだろうと展開させている。橋姫が網代守を友とするとみるのは、彼も一夜寝ないで網代を監視していなければならぬからである。

この歌に対して「玉箒」は「此歌上下かけあはず」と批判しているが、これは上三句と下二句が乖離しているとの指摘である。

しかし、月影が寒い光をなげかけている宇治川のほとりに、網代守は一夜寝ないで監視しているが、彼は同じく男を待って寝ない橋姫の友となるであろうとみると、場面はとらえられる。

(夜水鳥)

(46) をし鳥の床もさだめぬうきねして枕ながるる冬の池水(七三三)

(校異) なし

この歌では「枕ながるる」という措辞が特に目をひくがなみだ河枕ながる、うきねには夢もさだかに見えずぞ有りける

(読人しらず・古今・恋一・五二七)

の歌によっている。(46)の歌と比較すると、「うきね」「枕ながるる」が一致するが、本歌取の関係にあるとみるのは無理で、表現を借りてきたものであろう。

鴛鴦鳥が寝床も定まらないような浮き寝をしているため、冬の池水に枕がながれてゆく景をよんでいる。

寒い冬の池に不安定な浮き寝をしている鴛鴦鳥に限りなき憐みをかけている。

「諺解」は先掲の「古今集」の歌のほかに、

冬の池の水にながる、あしがものうきねながらにいくよへぬらん

(読人しらず・後撰冬・四九一)

の歌を類歌にあげている。

竹霰

(47) 霜こぼる朝けのまどの竹の葉にあられくだくる音のさむけさ(七五六)

(校異) さむけさーさやけさ(承応)

校異のうち「音のさやけさ」よりも、「音のさむけさ」の方が、おかれた状況からみて適切な表現である。聴覚が作用して、触覚が随伴する、共感覚的表現になっている。

霜が氷りついている早朝の窓辺の竹の葉に、霰がくだけ散っているが、その音が寒々と聞えるという意。

「霜こぼる」の対象は「朝けの窓」であり「竹の葉」でもある。

竹の葉に降りくる霰はそのままでも寒々とするのに、まして霰が氷りついた竹の葉にくだける音は、一段と寒々と聞こえるというのである。「あられくだくる」としたのは、竹の葉が霜で固くなっている

があるが、ここでも「影ぞ程なき」ととらえている。  
竹の小枝からかすかに洩れてくる月光に照らされ、庵の窓には竹の葉の影まで映っている景である。

この場面での「窓」は明り障子を想定しているであろう。「さへ」といったのは、月光が映っているうえに、竹の葉も映っているためである。風による竹の葉のそよぎさえない、視覚を通しての静寂な世界である。

河霧

(42) あじろ木のあたりしられて朝ぼらけ霧にいざよふうぢの川波

(校異) なし

(五九二)

この歌は

もののふの八十氏河の網代木にいざよふ波の行く方知らずも

(柿本人磨・万葉巻三二二六四)

を本歌としないまでも、念頭においていたことは、「あじろ木」「うじ川」の一致、「いざよふ波」を「霧にいざよふ」とし、「行く方知らずも」を「あたりしられて」と転化していることからみて、まず間違いないであろう。

宇治川の波が霧の中に漂うようにみえることで、網代のあり所がわかるという意である。

一首の発想には知的な面もあるが、朝方のうぢ川には朦朧と白い霧が一面にたちこめ、ある所だけ霧の動きが他と違っている景がイメージされる。「霧にいざよふ」という表現は「国歌大観」にもみえない特異なもので、この歌の要となっている。

(43) 露さむみ道のしば草うつろひてふるき都は衣うつなり(六一二)

(搦衣)

(校異) さむみーさむき(承応)、ふかき(内閣)

「諺解」はこの歌の本歌として

立ちかはり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり

(万葉集・巻六・一〇四八)

をあげ、さらにこれにならった歌として

玉ぼこの道のしば草うちなびきふるきみやこに秋風ぞふく

(後鳥羽院御集・四五三)

を列挙する。これらは「古き都」「道の芝草」は一致するが、本歌とするのは当たらないであろう。

この歌の季節は「搦衣」や「露」、それに「しば草うつろひて」により暮秋の頃であろう。

暮秋の露が寒くて道の芝草も色あせているのに、この古き都には、さすがに住む人があるのか衣を搦っている音が聞えるという景である。

色あせた芝草、寒い露、それに古い都と、いずれも寂寥とした中で、衣を搦つ音はいよいよ寂しさをつのらせるものとしてあり、懐旧の涙を催させる。

夕寒草

(44) 夕さればうかりし秋の風の音をかれ葉にのこす庭の荻原(七〇〇)

(校異) 夕さればー夕暮は(承応・内閣・松平)、のこすーのこる

(松平)

「夕されば」より「夕暮は」の本文の伝本が多いが、どちらにしても大きな変化はないであろう。

夕方になると、これまで憂くつらいものとして聞いてきた風の音

(八月十五夜)

(38) 老てみる今夜の月ぞあはれなる我が身もいつかなかば成けん

(五四一)

(校異) いつかーいつる (松平)

「諺解」が「月をながむるには。さらでもこし方を思ふに。今夜  
 八秋の半と云に感じて。我身の百歳の半。五十歳の事も有しに。い  
 つのまにか過去て。年のいたく老たるとなげく也……」と理解した  
 のに対し、「玉箒」は「諺解わが身のなかばを。百歳の半五十歳と見  
 たる。甚わろし。是はたゞ。我身のさかりのはるかに過たる事をい  
 へり。さかりといはずしてなかばといへるは。秋のなかばに對する  
 故也。」と批判しているが、「玉箒」の見解が妥当であろう。

「なかば成けん」と過去推量だし、現在は年老いて月を眺めてい  
 るのだから、我身にもこの月のように盛んなりしときもあつたのに、  
 いつのまにか時が過ぎ去つて、年老いてしまったというのである。  
 十五夜の月を年老いてから見るところに生じた述懐の歌である。

里月

(39) 更る夜の川をとながら山しろの水の、里にすめる月影(五三四)

(校異) なし

「山しろの水の、里」は「諺解」によると「美豆野淀の東也」と  
 する。勅撰集で、この歌枕は

山城の美豆野の里に妹を置きて幾度淀に舟呼ばふらん

(頼政・千載・恋四・八八五)

の一首だけみえるにすぎない。

(39)の歌は、夜が更けて川音が澄みわたるとともに、山城の美豆野  
 の里には月光がいよいよ澄みわたるといふ世界を詠じている。

深閑とした夜更けの心に染みいるような川音と、その音につられ

るかのように静かに澄みのぼる月、研ぎ澄まされた聴覚と視覚でと  
 らえた景である。

渡月

(40) くる、より川霧はれて夜舟こぐさほのわたりにすめる月影

(五四九)

(校異) わたりーわたせ (内閣)

「夜舟こぐさほのわたり」の「さほ」は、「棹」と地名の「佐保」  
 を掛けている。

日が暮れた頃から、今まで川面をつつんでいた霧がしだいに晴れ  
 て、棹で夜の舟をこぐ佐保川に月が澄んだ光を投げかけているとい  
 う景である。

「諺解」は「わたり」について「わたりハ。所によりて。あたり  
 の事をいふも有。難波にわたりなどの類也。此哥ハ佐保の渡口也。」  
 とする。

この歌には、霧が川面をおおっている景から、しだいに晴れてき  
 て、夜に月が出るまでの、ある時間の経過がもりこまれていて、「渡  
 月」という歌題なので、夜舟が川を渡るにつれて、月も移動して渡  
 ってゆくことになるのであろう。

竹間月

(41) さえだより月はもりきて竹のはの影さへ窓にうつる夜は哉(五七一)

(校異) なし

「さえだより」洩れるとするので、月光もほのかにイメージされ  
 る。小枝を洩れる月光を詠じたものに、「夏月透レ竹といふ事を」

さえだもる影ぞ程なき呉竹の夜わたる月の明けやすき頃

(前関白太政大臣・玉葉・夏三二八六)

萩露

(35) きく人の袖にぞむすぶ萩のはの風にとまらぬ秋の夕露(四四八)

(校異) なし

「きく人」とは萩の葉に吹く風の音を聞く人の意である。また、この風は同時に萩の葉に置く秋の夕露を吹き払ふものでもある。

秋の夕暮どきに風が吹くと、萩の葉に置いた露はたまらず吹き散らされてゆくが、その露が風の音を聞いている人の袖に結ぶと発想している。しかし、人の袖に結ぶ露は、古来、悲しいものとされてゐる萩吹く風の音を聞いて流す涙の露である。それを萩の葉から吹き散らされた露でもあるかのように二重写しにしたところに発想の巧みさがある。西行に

おほかたの露にはなにのなるならんたもとにをくはなみだ成けり

(山家集・二九四)

という歌があるが、頓阿の歌と一脈通うところがある。

月前鹿

(36) まち出るをなじ尾上の鹿の音を月よりをくる夜半の秋風(四九五)

(校異) なし

「をなじ尾上」といったのは、月の出る所と鹿の鳴いている場所がちょうど同じだというのである。

また、「月よりおくる」という措辞は正統国歌大観にもみえない斬新な表現である。

夜半の秋風の中で耳をすますと、尾上から鹿の悲しげな鳴き声がかすかに聞えてくるが、それはまるで、今、尾上から出た月の中から、おくられてくるような錯覚にとらわれるという世界である。

ここには、今しも尾上から光をあらわした月を凝視しながら、鋭敏に聴覚で鹿の音を聞きとっている感覚が働いている。

夕雁

(37) ゆふ日さす田のものはるかに雁鳴て秋かせさびし村雨の空(五〇六)

(校異) はるかに―はかりに(内閣)、さびし―さむし(承応・内閣)、

村雨―むら雲(承応・内閣・松平)

校異のうち、夕日がさしているところからみて「村雨」より「むら雲」の方が妥当な本文であるかもしれないので、一応、これによって解釈する。また、「秋かせさびし」という表現は、国歌大観にもなく唐突なようで、「さむし」の方が無理なく受け入れられるようだが、頓阿には他に

雁鳴て秋風さびしお花ちるしづくの田井の夕暮の空

(続草庵集・二〇五)

の用例があるので、底本のままとする。

夕日が田面はるかにさしているなかを、雁が鳴きながら、村雲が立ちまよう秋風の寂しく吹く空を飛んでゆくという意。

「田のものはるかに」の措辞は、頓阿に

伏見山松の木の間を出るより田の面はるかに月ぞうつろふ

(草庵集・五一七)

と見える。また、

夕日かげ田面はるかにとぶ鷺のつばきの外に山ぞくれぬる

(光厳院・風雅・雑・一六三五)

の歌の場面が類似している。この点、頓阿の歌は京極派的な要素を有しているが、なお仔細にみると、光厳院の歌が色彩が豊かなのに対し、頓阿の歌は、雁の鳴き声という聴覚でとらえるものをだして、全体に寂しさの気分をもちこんでいる。

## 「草庵集」秀歌評釈（下）

稲田利徳

この評釈は、本誌第五十七号に引き続き続くものである。注釈書の略称は、「諺解」は「草庵集蒙求諺解」、「玉箒」は「草庵集玉箒」を各々指す。また、校合本で、「承応」は「承応版本」、「松平」は「島原松平文庫本」、「内閣」は「内閣文庫本」の各々略称である。

\* \* \* \* \*

野露

(33) 吹にけりをけばかつ散しら露の玉のよこ野の秋のはつかぜ(四三三)

(校異) なし

「諺解」は「玉横野、和泉也。」とする。「玉のよこ野」としては

勅撰集にないが、家隆の「玉吟集」に

雲さそふみねの木がらしふきなびきたまのよこのにあられすぐなり  
(一六五七)

とみえる。(33)の歌では「しら露の玉」と「玉のよこ野」が掛けられている。「をけばかつ散」は、露が置いたかと思うと一方で秋風に吹き散らされるといふ現象が幾度か繰り返されている景である。

玉の横野に秋の初風が吹くたびに草葉に置いた露の玉が吹き散らされている景をうたっている。西行の

あはれいかに草葉の露のこぼらん秋風たちぬみやぎ野のはら

(新古今・秋上・三〇〇)

の歌を想起するが、(33)の歌も、秋風のなかではかなく散ってゆく露に、哀れの世界をうたいあげているのであろう。

(露を)

(34) 草の葉にきゆればやがて置そへてあだなる程もみえぬ露哉  
(四三八)

(校異) 置そへて―置かへて(承応・内閣・松平)

「あだなる程もみえぬ」とは、消えやすくもろいとはみえない意である。露は草葉に置いたかと思うと、すぐにはかなく消えてゆくが、やがて次の露が置くので、まるで消えやすいとも思われない露であることだという意。

露は歌の世界では、はかなく消えやすいものとして取材されてきたが、ここでは伝統的なとらえかたを逆手にとって「あだなる程もみえぬ」と発想したところに新味がある。

作者の視線はあくまで草の葉の上に注がれ、そこに繰り返される変化を見ているわけだが、現実の現象としては、この歌の世界のようにはとらえられないだろう。その意味で、この発想はあくまで想念の世界で思い描かれたものといえよう。